

富山県コンクリート診断士会 受験対策講座を開講 個人の資格を活かす



森会長

富山県コンクリート診断士会（森直生会長）は2023年度からコンクリート診断士試験の受験対策講座を開講している。同会は07年の設立後、コンクリートの診断・補修業務に関する技術セミナーと、実際に劣化したコンクリート構造物などを視察し、会員の技能向上に貢献する現場見学会を主な行事としてきた。これらに加えて、新たに受験対策講座を開講することで、診断士試験への受験者増加や同会への新

規加入を呼びかけていく狙い。

24年2月に開催した講座では、C&Rコンサルタントの小野定氏が講師を務め、択一問題や記述問題に関する講習を行った。24年度も25年2月22日にNIX・JAPAN（富山市）で、小野氏を講師

に迎えて受験対策講座を開講する。23年度は午後スタートの半日コースだったが、アンケート調査で受講者からの評判が良かったことから、今回は午前からの講義を行う終日開催として、内容を充実させる。

同会は24年度から技術、総務、広報の3部会を設置した。これまでは会長1人、副会長2人、会計と書記それぞれ1人、10人程度の理事で執行部を構成していたが、部会を設けることで役割を明確化させる。技術部会は同

会が発足当初から行っ

てきた技術セミナーと現場見学会の規格運営を担当し、広報部会は同会の運営するHPやFacebookやInstagramといったSNSの更新のほか、技術セミナーや現場見学会の内容を記録し、HPなどを更新している。

富山県の特徴として、コンクリート構造物の診断業務は調査会社だけでなく、コンクリート診断士の資格を持つ個人に依頼されることも多いという。森会長は「私も安川榮志前会長から仕事を斡旋してもらった経験がある。（診断士の資格は）会社の業容と違っても個人の資格であることが実感できる」と

評価する。

県内のコンクリート構造物は、海からの飛来塩分だけでなく、凍結防止剤に起因した塩害、さらにアルカリシリカ反応（ASR）、山

間部では凍害といった劣化要因がある。特に厄介なのが複合劣化だ。一見すると塩害やASRなどに特定されるものの、初期劣化の段階で、大型車の過積載などによる輪荷重が作用したり、凍結防止剤が溶け出した塩水に曝されたことによる複

合劣化となっているケースは数多い。このため、県内のコンクリート診断士には、こうした知識を蓄積するだけでなく、実際の業務に活かしていくことが求められている。森会長は「富山だけでなく、

診断士会は産学官が人付き合いをする大きなプラットフォームだと考えている。近年は鋼構造に関する診断業務も依頼されるケースが増えており、知識をアップデートしていくことは必要不可欠。人との交流を通じて、構造物の診断や維持管理、修繕に至る情報を交換

することが個人の技術習得、向上に寄与している」と語っている。

また、日本コンクリート診断士会（JC D、橋高義典会長）で企画部会の部長を務めている森会長は、JCDが日本コンクリート工学会（JCI）と

行っている意見交換会で「弁護士や公認会計士、行政書士に至るまで士業と呼ばれる人々は、その資格がないと記入できないものがある。コンクリート診断士は試験の合格率が低い非常に難しい資格であるにも関わらず、そうしたことがない。JCIの前川宏一会長にも、他の士業と同じように『診断士でなければできないことはないか』と訴えてきた」と語っている。

語っている。